

井山七冠と無作爲試行錯誤

市川 浩

平成二十八年四月三十日（土）晴

弱齡二十六歳の棋士井山裕太九段、圍碁七大名跡タイトルの中、六つを制して六冠と稱せらるゝこと三度、今回去る四月二十日残る一つ「十段位」を奪取、史上初の「七冠」を得、名實共に日本最強棋士となる。

我が國の圍碁は漢土より傳來せるも、江戸時代大いに研究進み、和風文化の一翼として大いに羽搏くも、近時は中韓兩國を始め世界の圍碁人口増加により、その優位は免角失はれつ。井山七冠により再び世界に雄飛するを期待する中、チェス、將棋を相次ぎ攻略せる電子頭腦の參戰あり。

圍碁は盤面に三百六十一の著手點ありて複雑なれば、専門棋士に勝つは至難と思へるも、ここへ来て「アルファ碁」なる電子算略ソフト登場して、昨年十月歐州圍碁選手權者の強豪、樊麾はんき（ファン・ファイ）二段に互先五連勝に續き、本年三月十五日韓國第一人者の李世乭りせいとる（イ・セドル）九段に互先四勝一敗を擧ぐ。

この算略、英國グーグル・デイトップマインド社の開發にて、「モンテカルロの木探索」と銘打ち、「深層學習ディープラーニング」なる新しき概念に基くと云々。精しくは辨らねど、地中海はモナコ國營賭博場の地名に因む「モンテカルロ法」は統計理論にては無作爲抽出を意味し、對局持時間の範圍内に於て無作爲抽出による手順を繰返し、その結果を評價して著手を決定する點に於て、從來の電算機思考の範圍を出でざらむと思へるも、その手順數の莫大なるを短時間に比較的少數の類例に要約分類する算法の開發こそその心髓なるらめ。

無作爲抽出により試行錯誤を繰返す「モンテカルロ法」は電腦解析の基本の一つなるも、同時に如何にも泥臭く、叡智の介在なきが如きは電腦の限界を表はすらむ。然れども孔子韋編三絶して易に十翼を著し、達磨祖師少林寺に至りて面壁九年始めて悟り、今日にても青色發光素子ダイオードは無數の試行錯誤の結果たるなど、人類の歴史を飾る偉大なる業績も長年の研鑽、苦闘の末に得られたるを思はゞ、電腦も亦試行錯誤の回数人間を遙かに超ゆれば、人間の「閃き」、「悟り」にも勝るとも劣らざるべし。當に師を越ゆる弟子あり、後生畏るべしとは至言にして、努々電子頭腦は人間の造れるものなれば、所詮人間を超ゆる能はずなど言ふべからざるなり。

最近の腦研究、海馬に蓄ふる記憶、睡眠を通じ次第に大脳皮質に格納、永久記憶となると云々。之業腦パンコンに於ける記憶領域RAMメモリと固定記憶盤ハードディスクとの關係に等し。然れば試行錯誤の經緯は大脳皮質にて永久記憶となり、或る日奇跡的に蘇り、大いなる成果を産むに至らむ。即ち試行錯誤こそは凡ゆる人間營爲に於ける至高の王道なりと知るべけれ。

井山七冠は「アルファ碁」との對局を希望すと云々。前述の李九段には現在二勝六敗と負越し中の由なるも、もし實現せば七冠に至る試行錯誤の質の高さと、電子算略の膨大な記憶の驅使との對決と觀ずべく、その結果こそ待たるれ。それにつけても吾が打碁の記憶海馬にすら残らず。嗚呼。

（平成二十八年五月三十日受附）